

まとめ

調査の結果、前山A58号墳は、墳長約20m、後円部径約14m、前方部長約6mの小形の前方後円墳であることがわかりました。古墳の築造時期については、石室の形態や、出土した円筒埴輪などの出土遺物を総合的に検討すると、6世紀前半に位置づけられます。

墳丘の築造は、前方部の南端付近は岩盤を整形して行い、その他の大部分は盛土により構築されていることが明らかとなりました。これは、北側へ傾斜する狭い尾根上に、後円部を北に向けて古墳を築造したためと考えられます。

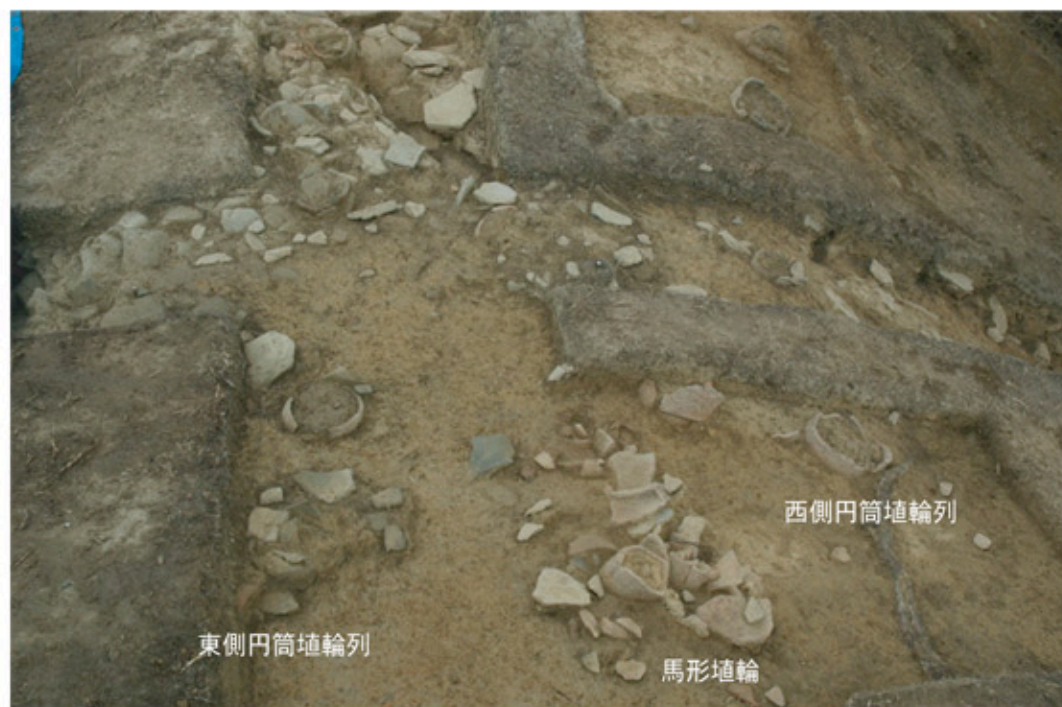
後円部は、墳頂部については削平を受け詳細は明らかではありませんが、墳丘斜面には1段のテラスが巡り、テラス上には、円筒埴輪を配列する状況が認められました。検出された円筒埴輪は、石室奥壁の中央を中心とした直径約12mの正円上に配置され、テラス内側のラインとともに古墳構築における企画性を認めることができます。一方、墳丘の裾部である墳裾は、正円形とはならず、歪んだ円となるものと考えられます。これは、尾根頂部の先端に後円部を構築したことにより、地形の制約を受けたためとも考えられます。

前方部では、南端及び南東隅の墳裾を確認しました。前方部の墳頂平坦面は円筒埴輪列により囲われ、その内側の後円部寄りに馬形埴輪が樹立されています。その他の埴輪等の配置は不明ですが、墳丘上に堆積する土層からは、人物埴輪の頭部及び腕部、石見型埴輪、朝顔形埴輪、須恵器大甕等が出土しました。今後のさらなる検討が必要ですが、埴輪の種類としてはそれほど多くはないことから、本来前方部の墳頂平坦面には、馬形埴輪と人物等の数種類の形象埴輪及び須恵器が配置された小規模な埴輪祭祀の場が復元される可能性が高いといえます。

今回の調査では、小形の前方後円墳における埴輪祭祀の姿を目にすることができました。岩橋千塚古墳群においては墳長約86mの県内最大の前方後円墳である大日山35号墳が知られていますが、こうした首長墳に対して、墳長約20mの前山A58号墳は同古墳群の前方後円墳の中では小規模クラスであり、今回の成果は岩橋千塚古墳群の階層構造や特質を理解する上でも重要な成果といえます。



石見型埴輪検出状況(9トレンチ) 西から



東側円筒埴輪列

西側円筒埴輪列

馬形埴輪

前方部埴輪検出状況(4・5・7・8トレンチ) 北から

特別史跡岩橋千塚古墳群 前山A58号墳の発掘調査

平成23年4月29日
和歌山県立紀伊風土記の丘

はじめに

特別史跡岩橋千塚古墳群は、昭和27年に国の特別史跡に指定され、現在指定地内には5世紀から7世紀にかけて築かれた約430基の古墳が確認される全国最大級の古墳群です。県立紀伊風土記の丘では、これを保存し後世に伝えると共に、歴史を学び親しむ場として古墳群の整備・公開を進めています。

和歌山県では、平成15年度より、特別史跡岩橋千塚古墳群の保存整備事業を実施しています。

このうち、古墳公開地区にある前山A58号墳についても将来的に整備・公開を行う予定であり、その基礎資料を得る目的で発掘調査を実施しました。調査は、平成22年1月～3月及び、平成23年1～3月に実施しました。

なお、前山A58号墳は、園内の前山A地区に所在し、周辺には前山A99号墳(横穴式石室)、A111号墳(竪穴式石室)、A100号墳(箱式石棺)など石室の見学の可能な古墳が分布する公開古墳地区に所在しています。



位置図



前山A58号墳全景 南東から

発掘調査の概要

〔石室の調査〕

横穴式石室は、遺体を埋葬する墓室である玄室（げんしつ）と、玄室にいたる通路である羨道（せんどう）及び玄室前道（げんしつぜんどう）からなります。本石室は、玄室長が約2.5m、羨道及び玄室前道長が約2.2mの全長4.7mの横穴式石室です。

玄室は結晶片岩を積み上げて構築されており、高さ1.4m程度まで残存していますが、天井石等は盗掘により取り除かれていました。玄室は盗掘を受けていたために、埋葬当時の状況は残されてはいませんでした。堆積していた土を除去した結果、須恵器の坏（つき）、土師器の小形壺、鉄鏃等が出土しました。また、石室内では屍床（ししょう）と呼ばれる遺体を直接のせるための施設が残存していることが明らかとなりました。

このほか、石室内に堆積していた土を持ち帰って篩（ふるい）により水洗した結果、須恵器坏、鉄鏃、ガラス製小玉・滑石製白玉・土製丸玉などが確認されました。

羨道部に設定した6トレンチでは、玄室の入り口を塞いだ閉塞石（へいそくせき）が、当時の状態を保ったまま確認されました。



玄室 西から



羨道部からみた閉塞石（6トレンチ）西から

〔墳丘の調査〕

1トレンチ

後円部の北側の墳丘斜面を確認しました。墳丘の斜面にはテラス（斜面の途中に造られた平坦な部分）が確認されました。テラスは幅約1mで、上面には少なくとも円筒埴輪1個体が樹立されていたと考えられます。墳丘は、埴輪より盛土によって構築されていますが、テラスよりも高い側の墳丘斜面では盛土内に扁平な礫を丁寧に積み重ねた様子が確認されました。

2トレンチ

後円部の東側の墳丘斜面を確認しました。墳丘の斜面では1トレンチより連続するテラス及び円筒埴輪列を確認しました。テラスの幅は約1.6mで、中央に南北に並ぶ円筒埴輪を3個体が樹立されていたことを確認しました。トレンチの東端では、地山が確認され、墳丘は埴輪より地山上に盛土を施して構築しています。

3・9トレンチ

後円部から前方部につながるくびれ部を確認しました。くびれ部では、後円部側で1・2トレンチより続くテラス面の円筒埴輪等3個体が樹立されていることを確認しました。このうち中央の埴輪付近では石見型埴輪が横倒しの状況で検出されたことから、中央の埴輪は、石見型埴輪の台部に相当する可能性があり、テラス面の円筒埴輪列に石見型埴輪が組み込まれて樹立していたと推定されます。

また、3トレンチでは西側へ傾斜する地山上に盛土を施して墳丘を構築していることが明らかとなりました。

4・5・7・8トレンチ

前方部の墳頂平坦面における埴輪の樹立状況を確認しました。4トレンチでは 前方部墳頂平坦面の東側の埴輪列を確認し、また、5・7・8トレンチでは西側の埴輪列を確認しました。前方部前面の範囲では埴輪列は残存していなかったものの、本来は円筒埴輪列が前方部墳頂平坦面を囲んでいたものと推定されます。

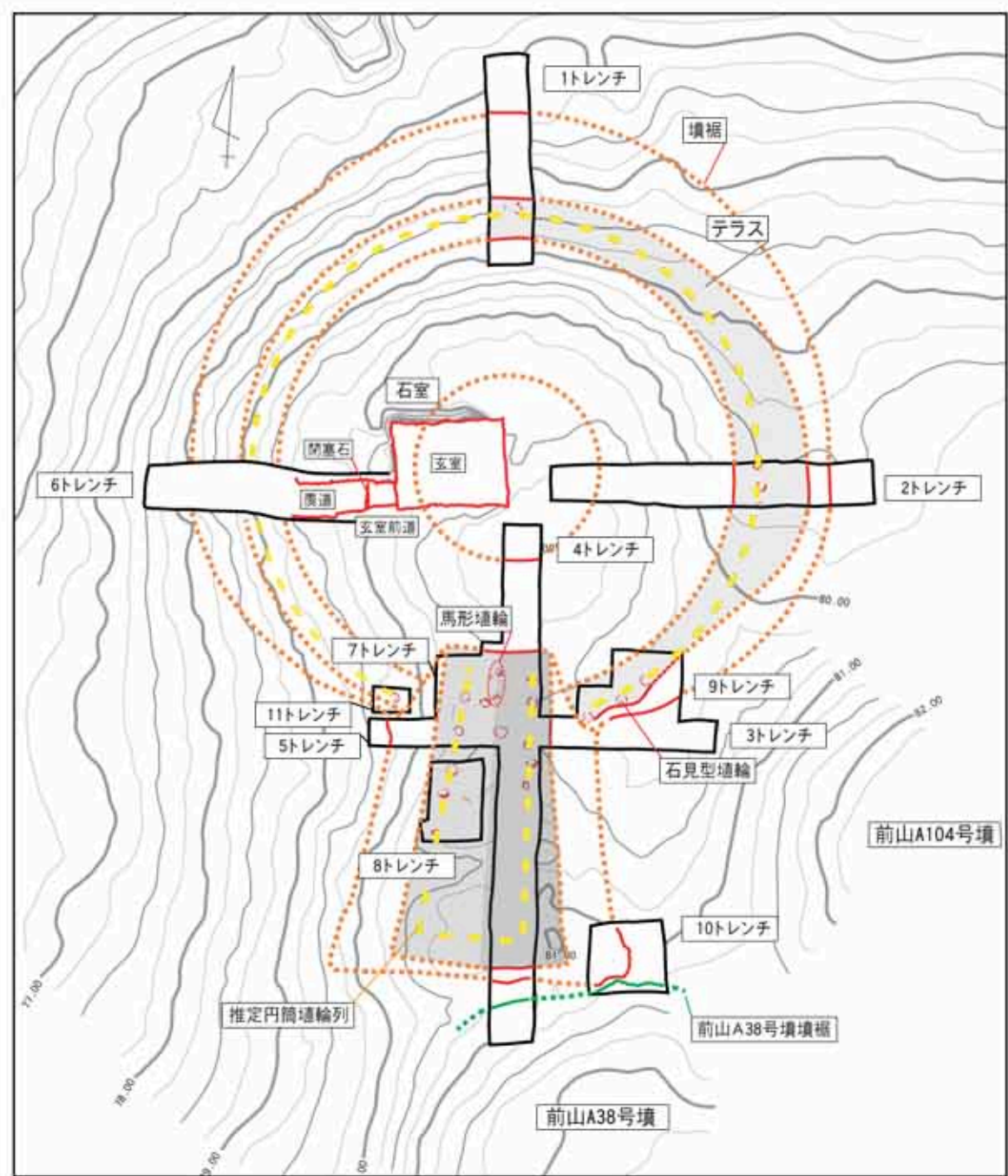
また前方部を円筒埴輪列で囲われた範囲の内側においては、後円部寄り馬形埴輪の脚部が原位置で確認されました。この他原位置をとどめる埴輪が計3個体確認され、その一部は形象埴輪の台部である可能性があります。また、4トレンチの南端では、前方部の南端の埴輪が確認され、軟質の岩盤を削り出して埴輪を整形し、その上に盛土を施して前方部を構築していることがわかりました。

10トレンチ

前方部の南東隅（コーナー）を検出しました。4トレンチ南端と同様に軟質岩盤を削り出すことにより墳丘を整形しています。また、トレンチの南側では、箱式石棺をもつ前山A38号墳の埴輪及び墳丘斜面が確認され、同様に軟質岩盤を削り出している様子が確認されました。

11トレンチ

西側のくびれ部付近の後円部テラス面に樹立された円筒埴輪1個体を原位置で確認しました。



前山A58号墳 トレンチ配置図 (S=1/150)